

前年度（25,636件）と比べて7%減少した。また、平成24年度の虐待判断事例件数は、養介護施設従事者等によるものが150件、養護者によるものが15,202件となっている。養護者による虐待の種別（複数回答）は、身体的虐待が65.0%で最も多く、次いで心理的虐待（40.4%）、経済的虐待（23.5%）、介護等放棄（23.4%）となっている。

養護者による虐待を受けている高齢者の属性を見てみると、女性が約8割を占めており、年齢階級別では「80～84歳」が24.6%と最も多い。また、虐待を受けている高齢者のうち、約7割が要介護認定を受けており、認知症である者（要介護認定者における認知症日常生活自立度「Ⅱ以上」の者）が、被虐待高齢者全体の74.1%を占めた。また、虐待の加害者は、「息

子」が41.6%と最も多く、次いで、「夫」18.3%、「娘」16.1%となっている（図1-2-6-10）。

#### (4) 高齢者による犯罪

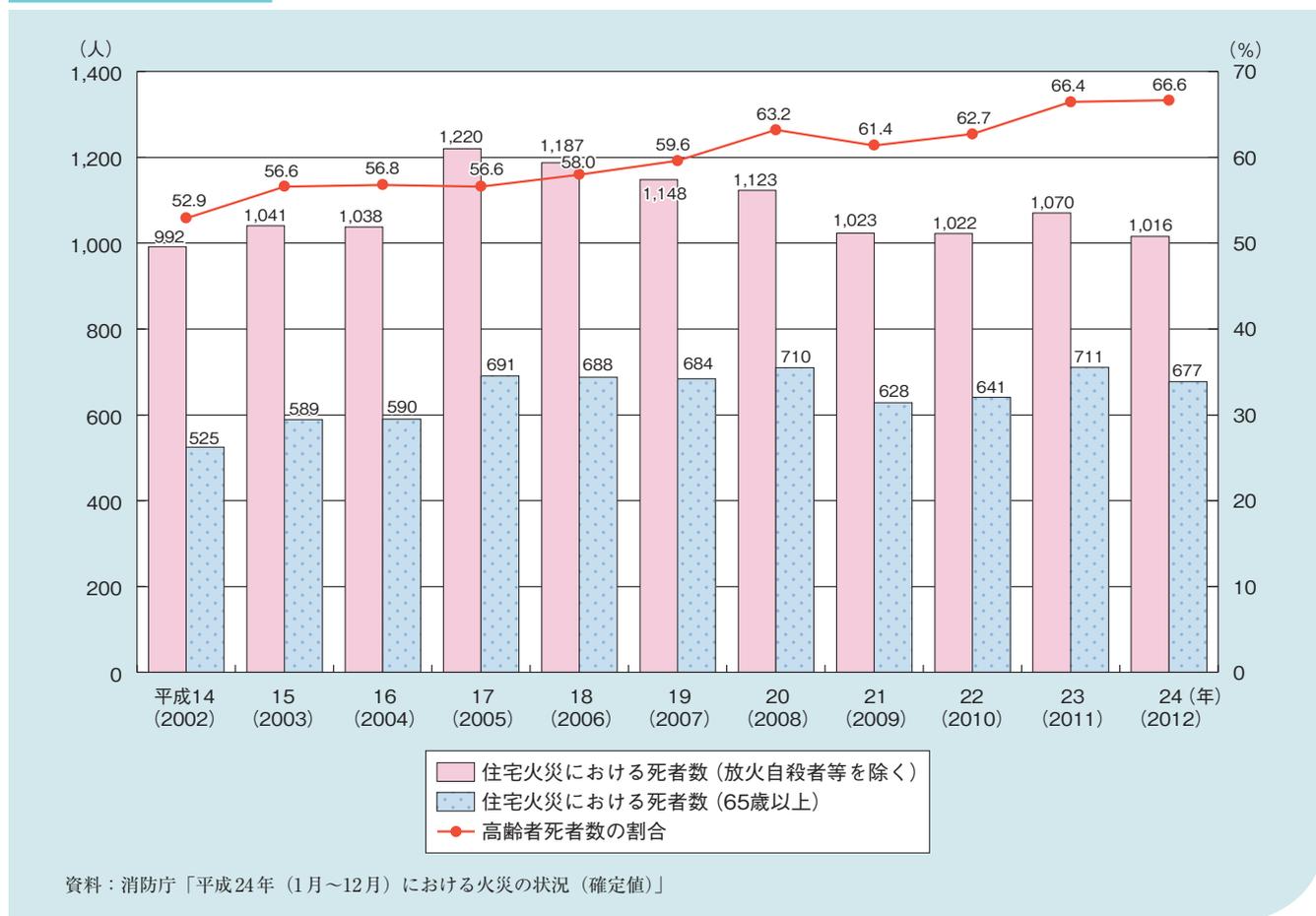
高齢者の刑法犯の検挙人員は、平成24（2012）年は48,544人と前年に比べほぼ横ばいであったものの、14（2002）年と比較すると、検挙人員では約2倍、犯罪者率では約1.5倍となっている。また、24年における高齢者の刑法犯検挙人員の包括罪種別構成比をみると、窃盗犯が73.5%と7割を超えている（図1-2-6-11）。

#### (5) 高齢者の日常生活

##### ア 生きがいを感じている人は約8割

60歳以上の高齢者が生きがいをどの程度感

図1-2-6-9 住宅火災における死者数



じているかについてみると、「十分に感じている」人と「多少感じている」人の合計は約8割に達している。男女別にみると、女性（83.2%）に比べて男性（79.8%）が低くなっている（図1-2-6-12）。

イ 毎日の生活を充実させて楽しむことに力を入りたい人が多い

内閣府「国民生活に関する世論調査」（平成25（2013）年）によると、今後の生活で「貯蓄や投資など将来に備える」ことよりも「毎日の

図1-2-6-10 養護者による虐待を受けている高齢者の属性

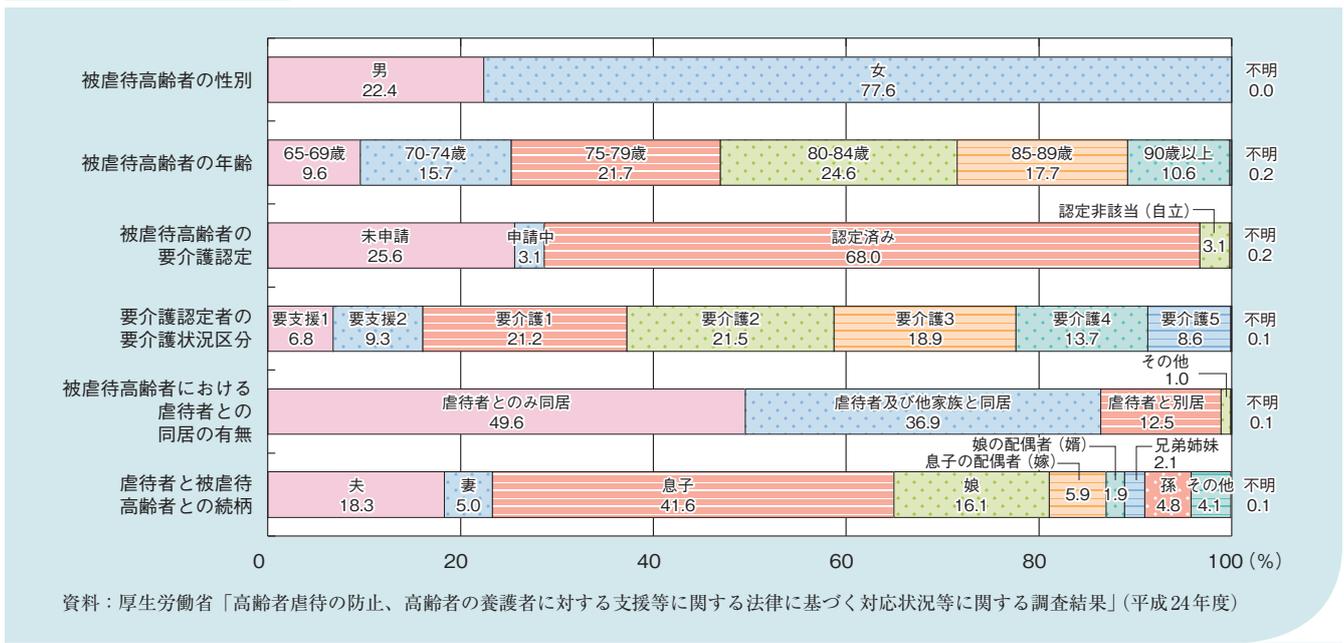
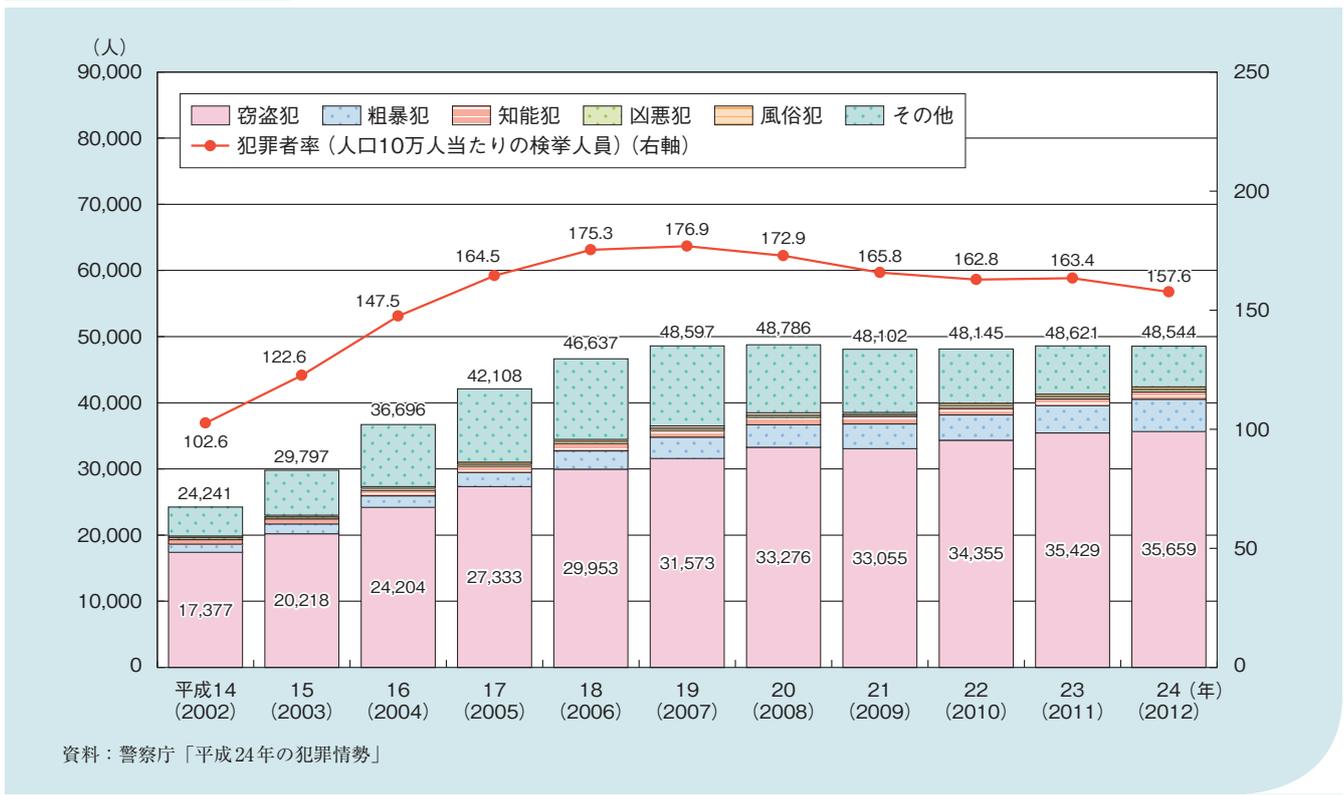


図1-2-6-11 高齢者による犯罪（高齢者の包括罪種別検挙人員と犯罪者率）



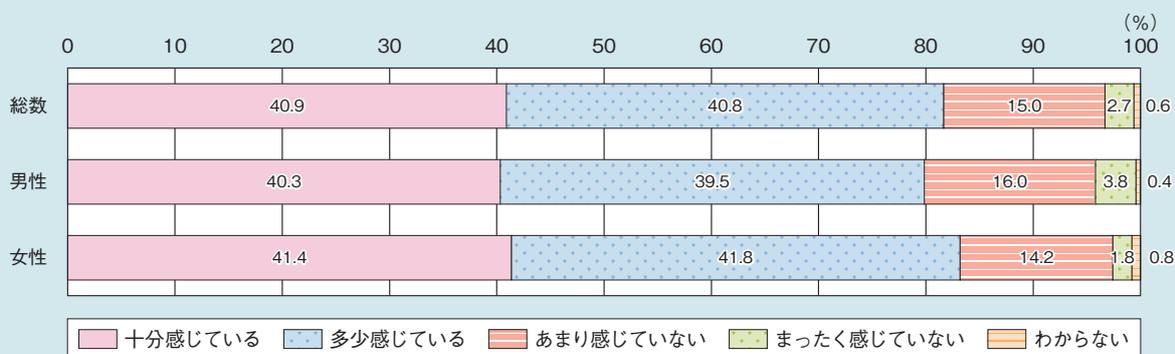
生活を充実させて楽しむ」ことに力を入れたい人の割合は、60～69歳は75.5%、70歳以上は83.5%であり、50～59歳では約6割、49歳以下の各層では4割前後であるのに対して、60歳以上の各層の割合は非常に高い。また、15（2003）年と比べると、約7割から約8割に増加している（図1-2-6-13）。

### ウ 一人暮らしの男性に、人との交流が少ない人や頼れる人がいない人が多い

60歳以上の高齢者の会話の頻度（電話やEメールを含む）をみてみると、全体では毎日会話をしている者が9割を超えるものの、一人暮らし世帯については、「2～3日に1回」以下の者も多く、男性の単身世帯で28.8%、女性の単身世帯で22.0%を占める（図1-2-6-14）。

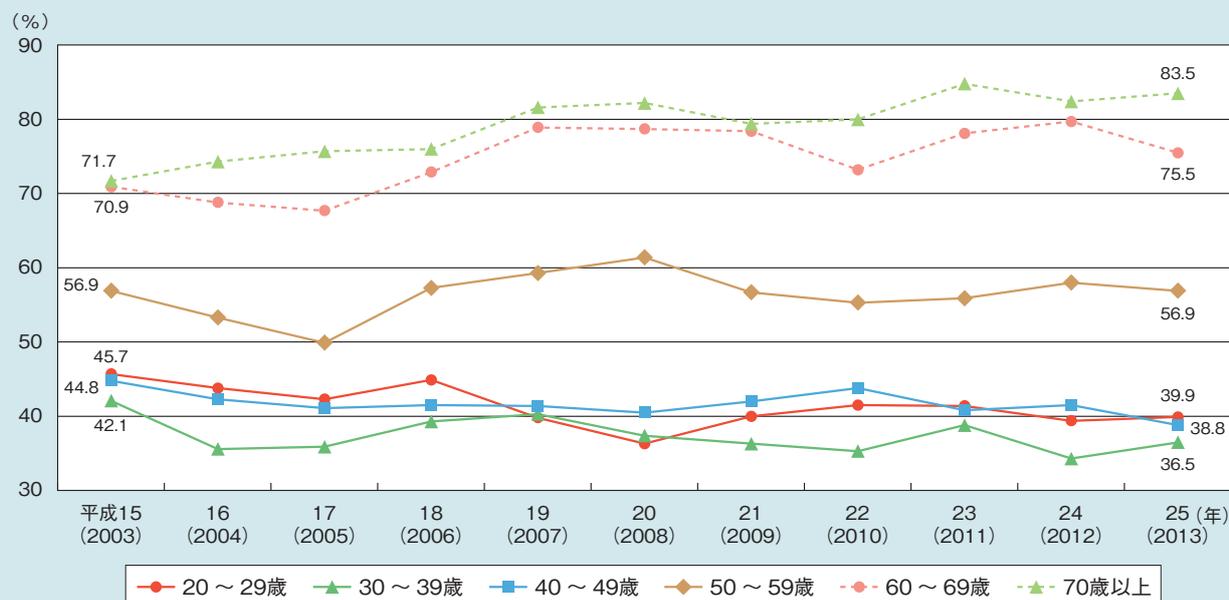
近所づきあいの程度は、全体では「親しくつ

図1-2-6-12 生きがいの程度



資料：内閣府「高齢者の健康に関する意識調査」（平成24年）  
 （注）対象は、全国60歳以上の男女

図1-2-6-13 生活を充実させて楽しむことを重視する人の割合

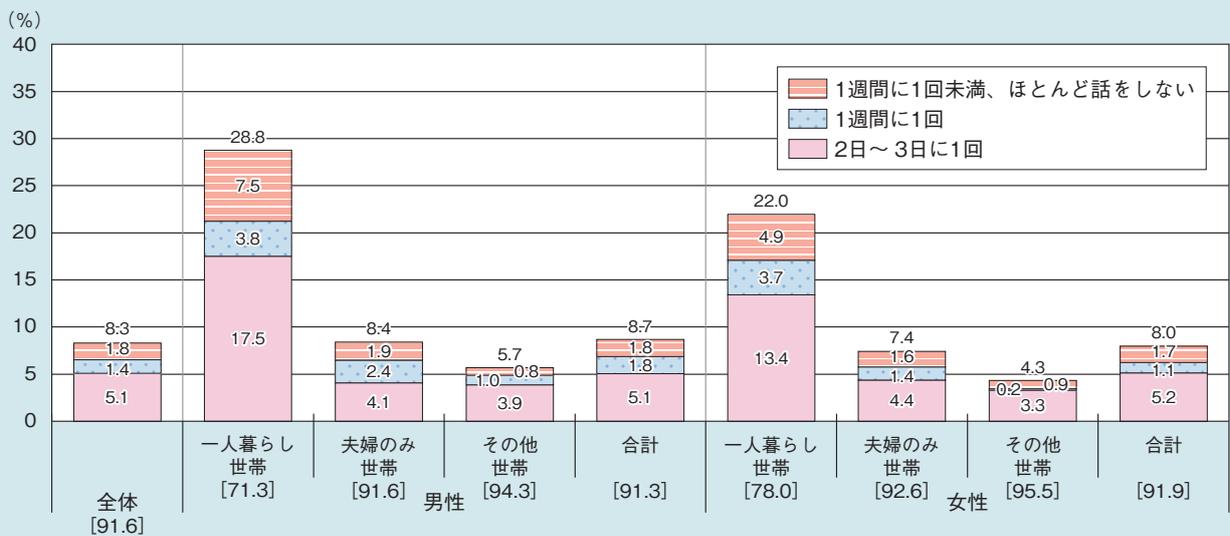


資料：内閣府「国民生活に関する世論調査」

きあっている」が51.0%で最も多く、「あいさつをする程度」は43.9%、「つきあいがほとんどない」は5.1%となっている。性・世帯構成別に見ると、一人暮らしの男性は「つきあいがほとんどない」が17.4%と高く、逆に一人暮らしの女性は「親しくつきあっている」が60.9%と最も高くなっている（図1-2-6-15）。

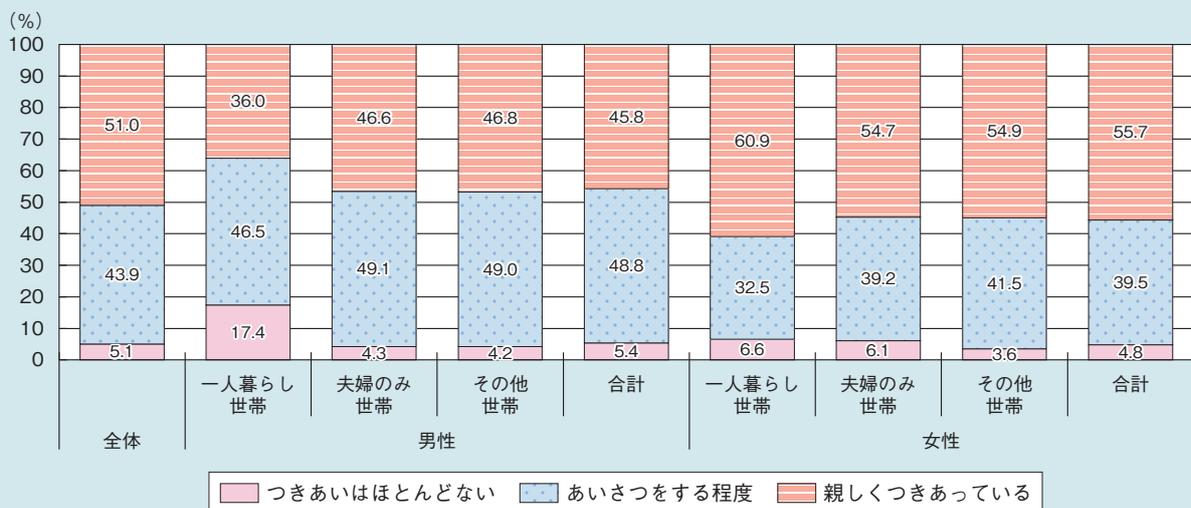
また、病気の時や、一人ではできない日常生活に必要な作業（電球の交換や庭の手入れなど）の手伝いについて、「頼れる人がいない」者の割合は、全体では2.4%であるが、一人暮らしの男性では20.0%にのぼる（図1-2-6-16）。

図1-2-6-14 会話の頻度（電話やEメールを含む）



資料：内閣府「高齢者の経済生活に関する意識調査」（平成23年）  
 (注1) 対象は60歳以上の男女  
 (注2) 上記以外の回答は「毎日」または「わからない」  
 (注3) [ ] 内の数値は「毎日」と答えた者の割合

図1-2-6-15 近所づきあいの程度



資料：内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」（平成22年）  
 (注) 対象は60歳以上の男女

## エ 孤立死と考えられる事例が多数発生している

誰にも看取られることなく息を引き取り、その後、相当期間放置されるような「孤立死（孤独死）」の事例が報道されているが、死因不明の急性死や事故で亡くなった人の検案、解剖を行っている東京都監察医務院が公表しているデータによると、東京23区内における一人暮らしで65歳以上の人の自宅での死亡者数は、平成25（2013）年に2,733人となっている（図1-2-6-17）。

また、独立行政法人都市再生機構が運営管理する賃貸住宅約75万戸において、単身の居住者で死亡から相当期間経過後（1週間を超えて）に発見された件数（自殺や他殺などを除く）は、平成24（2012）年度に220件、65歳以上に限ると157件となり、20（2008）年度に比べ全体で約4割、65歳以上では約8割の増加となっている（図1-2-6-18）。

## オ 孤立死（孤独死）を身近な問題と感じる高齢単身者は4割を超える

誰にも看取られることなく、亡くなったあと

に発見されるような孤立死（孤独死）を身近な問題だと感じる（「とても感じる」と「まあ感じる」の合計）人の割合は、60歳以上の高齢者全体では2割に満たなかったが、単身世帯では4割を超えている（図1-2-6-19）。

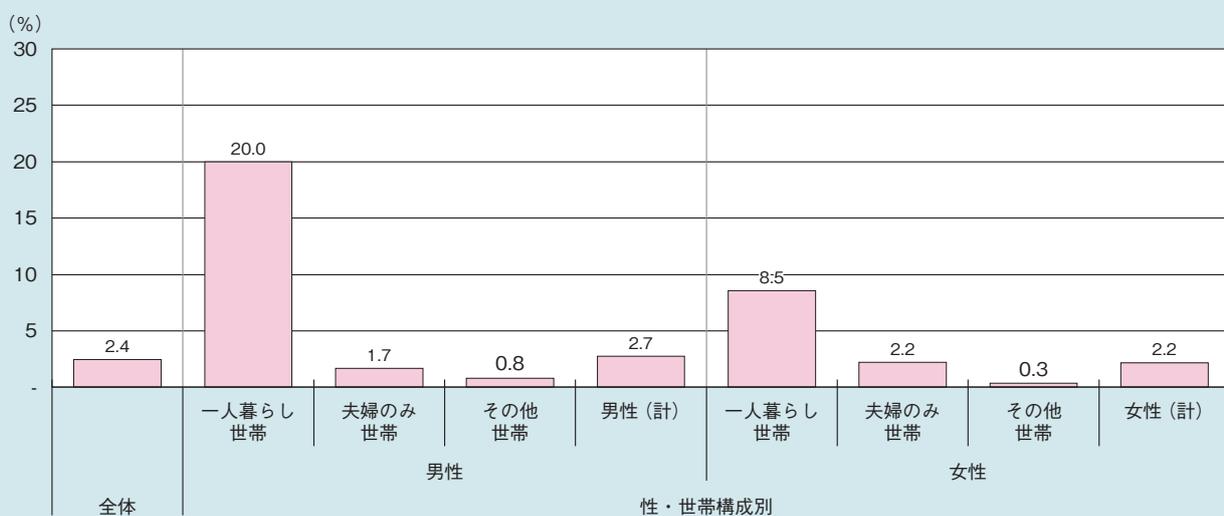
## (6) 高齢者の自殺

平成25（2013）年における60歳以上の自殺者数は11,034人で、前年から横ばいである。年齢階層別にみると、60～69歳は4,716人と前年に比べ減少した一方、70～79歳（3,785人）、80歳以上（2,533人）は増加している（図1-2-6-20）。

## (7) 東日本大震災における高齢者の被害状況

平成23（2011）年3月11日に発生した東日本大震災における高齢者の被害状況をみると、被害が大きかった岩手県、宮城県、福島県の3県で収容された死亡者は26（2014）年3月11日までに15,814人にのぼり、検視等を終えて年齢が判明している15,717人のうち60歳以上の高齢者は10,384人と66.1%を占めている（図1

図1-2-6-16 困ったときに頼れる人がいない人の割合



資料：内閣府「高齢者の経済生活に関する意識調査」（平成23年）  
 (注) 対象は60歳以上の男女